

時津町は「家読」を推進しています

# たまには テレビをけして

(高学年) 2025年 秋号



発行：時津町立時津図書館

## 家読とは

家族みんなで好きな本を読んで、読んだ本について話す。これが「うちどく（家読）」です。  
難しいルールは要りません。

家族みんなでルールを決めてはじめてみましょう。

家族で同じ本を読みあったり、おとうさんやおかあさんに読み聞かせをしたりと楽しい時間を過ごしましょう。



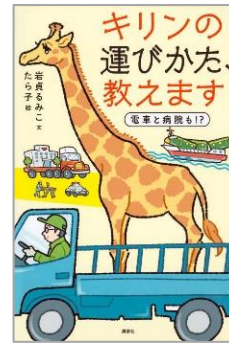
「みんな みんな とってもすてき」  
パティスト ポーリユー//文 チン レン//絵  
ひがき ゆみ//訳（ひさかたチャイルド）

お医者さんだったおじいちゃん<sup>ひと</sup>が人<sup>ひと</sup>にはそれぞれ“からだの物語”<sup>ものがたり</sup>があることを教えてくれた。その人<sup>ひと</sup>のからだの特徴<sup>とくちょう</sup>は、その人<sup>ひと</sup>が今まで生きてきた証<sup>いま い</sup>が刻まれているらしい。  
まち<sup>まち</sup>を見わたしてみると、みんなそれぞれ“からだの物語”<sup>ものがたり</sup>があって…。現役のお医者さん<sup>いしや</sup>がかいた、周りの人<sup>まわ ひと</sup>、そして自分自身のことを大切に<sup>たいせつ</sup>に<sup>ほん</sup>したくなる本です。



「ヨークシャーの丘の幽霊」  
マーカス セジウィック//作  
野沢 佳織//訳（徳間書店）

家族で先祖<sup>かぞく</sup>の故郷<sup>せんぞ</sup>、ヨークシャー・デイルズにきたジェイミー。でも、それぞれが抱えている悩み<sup>なや</sup>のせいで家族はギクシャクしていた。そんな中、ジェイミーは幽霊<sup>ゆうれい</sup>をみて…。  
十代<sup>じゅうだい</sup>の少年<sup>しょうねん</sup>の繊細<sup>せんさい</sup>な気持ち<sup>きもち</sup>を描いた、感動物語<sup>えが</sup>です。



「キリンの運びかた、教えます  
電車と病院も!？」  
岩貞 るみこ//文 たら子//絵  
（講談社）

岩手県・盛岡市動物園で生まれたキリンの“リンゴ”は東京・上野動物園にお引っ越しすることになりました。でも、3.5メートルものキリンをどうやって運ぶの!?その他、「鉄道車両」「こども病院」の運び方を含めた3つの“運ぶお仕事”の物語。読んだら、きっと誰かに話したくなります!



「わたし、わかんない」  
岩瀬 成子//著（講談社）

みんなは私<sup>わたし</sup>のことを「わかんないさん」と呼ぶ。何を聞かれても、「わかんない」というからだ。だって、パパとママは仲が悪いわけじゃないのになぜ離婚したのかわかんないし、私<sup>わたし</sup>だって、学校に行きたくないのにどうして学校に行かなきゃいけないのか、何にもわかんないんだもん。  
世の中、わからないことが多すぎない?



「りりかさんのぬいぐるみ診療所  
思い出の花ちゃん」  
かんの ゆうこ//作 北見 葉胡//絵（講談社）

りりかさんはぬいぐるみのお医者さん<sup>いしや</sup>。あるとき、少年<sup>しょうねん</sup>が、ぬいぐるみのトリケラトプスをつれてきました。少年<sup>しょうねん</sup>が言うには、このトリケラトプスのまわりにあるものが、ことごとく消えるというのです。りりかさんが、ていねいに調べてみると、このぬいぐるみにはポケットがありました。そして、そのポケットは不思議な力<sup>ふしぎ</sup>を持っていたのです。



「ジェーンとキツネとわたし」  
イザベル アルスノー//絵 ファニー ブリット//文 河野 万里子//訳

変わり者<sup>か</sup>だと思われているエレーヌはいつもひとりぼっち。居場所<sup>いばしょ</sup>がないと感じる時、そっと本を開く。大好きな物語『ジェーン・エア』だ。

ある日、学校<sup>がっこう</sup>のみんなと4泊5日の合宿<sup>はく にち がっしゅく</sup>に行くことになった。友だちがい<sup>とも</sup>ないエレーヌにとってはゆうつつなだけ。でも、その合宿<sup>がっしゅく</sup>がエレーヌの気持ち<sup>きもち</sup>を少しずつ変えていく…。